

四川作家による軍閥の評価

——田聞一『混戦 争覇巴蜀』を中心に——

中 裕 史

はじめに

李白が「蜀道の難きこと、青天に上るよりも難し」¹と云うたように、四川は岷山山脈などの険阻な山々が陝西からの陸路を遮り、長江三峡が湖北からの水路を妨げてきた。にもかかわらず、豊饒な実りをもたらす盆地を持ち「天府之国」と呼ばれる四川は、その長い歴史の中で幾度も外敵の侵入を受けた。

中華民国期に限って見ても、四川は北洋軍や雲南軍、貴州軍と激戦を繰り広げ、これらを省外に押し返した。その一方で、四川はその内部でも対立が絶えなかった。各地に軍閥が林立して互いに抗争を繰り返し、「軍閥混戦」と呼ばれる混沌とした状況を生み出していたのである。

その混乱を収めて四川の統一を実現したのが劉湘である。いま劉湘の伝記によってその主な事績を列挙してみると、「軍閥混戦」に終止符を打って四川の統一を果たしたこと、一九二七年に三・三一事件をおこし、また紅軍の長征を妨げるなど反共行動をとったこと、四川を統制下におこうとした蒋介石と暗闘を展開して四川の

独立を守ろうとしたこと、抗日戦争が始まると四川軍を率いて出陣したこと、などである。^②

四川という一地域の立場から見ると、中国全体の立場から見ると、中国共産党の立場から見ると、立場をどこに置かによってさまざまな評価がありうるが見て取れるだろう。

さて、文学はこの劉湘をどのように捉えているであろうか。四川作家の田聞一は、『成都巷戦一九三二』や『霧鎖峨眉 蔣介石謀取四川紀実』、『混戦 争覇巴蜀』といった小説作品の中でいずれも重要な登場人物として劉湘を登場させている。

今井駿氏によれば、中国の研究では「抗日民族統一戦線成立前後から従来の軍閥たちを「軍閥」とは呼ばず、「地方実力者」と言った言葉を用いて呼んでいるし、日中戦争後にはもはや軍閥という呼称は余り用いられなくなる^③」ようである。その意味においては、劉湘は最後の軍閥の一人といえるだろう。

小論では、劉湘の人物形象をどのように描いているかを検討することによって、田聞一が四川の最大にして最後の軍閥をどのように評価しているかについて明らかにしたい。その際、『成都巷戦一九三二』は一九三二年の成都市街戦に限定した小説であり、すでに拙論でその演義体を採用した語りについて考察をおこなっている^④ので、今回はこれを除いた他の二作品、とりわけ前者が焦点を当てている峨眉山軍官訓練団のことも含めて、四川の中央化を目論む蔣介石との間でおこなわれた綱渡りのような駆け引きを広く叙述している後者を中心にして分析を試みることにする。

一 幕僚を通じた間接的評価

劉湘は、一九三三年の「二劉決戦」で劉文輝を破り西康一帯に押し込めて四川の統一を果たす以前から、配

下である第二軍の直系部隊に唐式遵や潘文華などの有能な軍人を師団長に任じていた他に、政治や財政、外交などの領域を任せることのできる人材をひろく招致することにも積極的であった。

四川陸軍速成学堂の同窓生である張斯可や喬毅夫は、劉湘の代表として、北洋軍閥の段祺瑞や吳佩孚、奉天軍閥の張作霖などとの交渉にあたったが、彼らはそうした際に、北京在住の四川知識人に連絡をつけて、その協力を仰ぐとともに、劉湘幕下への招聘をもおこなった。⁵⁾ 全国紙『北京晨報』の編集長であった張梓芳や段祺瑞政府の秘書長であった鄧漢祥も、そうして劉湘のためにその能力を発揮することになった人物であった。

田聞一は、『霧鎖峨眉 蔣介石謀取四川紀実』の第四章「暗中闘法」のなかで、鄧漢祥の目を通して、劉湘の人となり叙述している。

そしてこの時、遠く重慶にあって、武力によって四川を統一して「四川王」になろうと一心に考えていた劉湘は、時機を逃さず、鄧漢祥の助けを得るために特に天津に向向いた。軽装で僅かな従者を伴っただけの劉湘は、鄧漢祥の家にはほど近い中等の旅館に落ち着くと、長旅の疲れをもとせず、すぐに鄧の家を訪れた。⁶⁾

右の引用冒頭の「この時」とは、一九二一年八月に段祺瑞が天津に隠退した時をいう。⁷⁾ 田聞一は、劉湘がかねてより鄧漢祥の才能を高く評価していて、段祺瑞の下野で働き場所を失った鄧漢祥に、自分に力を添えてくれるよう要請するために、密かに天津を訪れたというプロットを設けたのであった。

劉湘に対して鄧漢祥は良い印象をもった。四川の隣にある貴州の人間である鄧漢祥は、平生から四川の動

静や人物に特に関心を払っていた。彼は、劉湘が実力を持った將軍であることを知っていたが、最も心を動かされたのは、劉湘がへりくだって賢人を敬うことであり、自身を清く保って汚れに染まらないこと、たばこも酒もたしなまず、アヘンもやらず、妓女を買わず賭博もやらず、妾も囲わずということだった。これは何と得難いことであろうか。⁸⁾

右の引用に見るように、鄧漢祥の目を通して語られる劉湘の形象は、およそ軍閥の領袖らしくないといっていくくらい、非常に秀でたものである。「自信を清く保って汚れに染まらない（潔身自好）」に続く記述は事実その通りであるが、いかに「へりくだって賢人を敬う（礼賢下士）」ではあっても、一九二一年八月の時点で四川軍總司令であり、四川省長も兼任していた劉湘が忍びで天津を訪れて鄧漢祥の出馬を乞うことは考えられない。

喬誠・楊統雲『劉湘』の記述によれば、劉湘は、一九二四年十一月の天津會議で中華民國臨時執政に推挙された段祺瑞に服従を誓うために、張斯可と喬毅夫を派遣して、段の秘書長である鄧漢祥にとりなしを頼んだという。鄧は、その後、段が下野すると、故郷の貴州に戻って軍閥の周西成の幕下にあったが、雲南軍との戦いで周が戦死したために、貴陽を逃れて重慶の劉湘のもとを訪ねたとある。⁹⁾

それでは、鄧漢祥がその能力と人脈を駆使して劉湘のために働く契機となる、二人の対面を、田聞一が前述のようなプロットに仕立てたのはなぜであろうか。

それは、ひろく人材を求めて幕下に招致するという劉湘の積極的な姿勢を、このプロットに象徴させて、賢者への渴望や謙讓の態度、ひいては志の大きさとといった劉湘の長所を讀者に訴えるためであろう。

さらにいえば、このプロットは、讀者にたやすく「三顧草廬」を想起させる。田聞一は、劉湘を劉備に重ね

ることである傑出ぶりを印象づける効果を狙ったのではないだろうか。前出の『劉湘』には、次節で述べる一九三四年十一月の劉湘と蒋介石の対面の後に、蒋介石の幕僚である楊永泰が、劉湘の秘書長となった鄧漢祥に対して、劉湘を劉璋だと揶揄したことが記されているが、田聞一は、あるいはこのことも念頭に置いた上で、蜀を奪われた劉璋でなく、皇帝の位に上り大国である魏に対抗した劉備になぞらえることによって劉湘の異才ぶりを示そうとしたとも考えられる。

二 南京での会見

一九三四年十一月、劉湘は蒋介石の呼び出しに応じて南京に赴いた。蒋介石の目的の一つは、四川で勢力を拡大しつつあった紅軍を撃滅することであったが、劉湘の側にも蒋介石の援助を必要とする事情があった。

前述した「二劉決戦」に四川の主要な軍閥が力を傾注している間隙を縫って、陝南にあった徐向前の紅四方面軍が川北に侵入し、通江、南江、巴中一帯を占領した。川北に防区を持つ田頌堯は、蒋介石によって川陝辺区剿匪督弁に任じられて、紅軍に攻撃を任されたが逆に大敗を喫した。

蒋介石は、一九三三年七月に劉湘を四川剿匪總司令に任命して、四川の各軍閥を動員して川北の紅軍に当たさせた。劉湘は六路の包圍軍を組織して総攻撃をかける手はずを整えたが、各軍閥の足並みが揃わず、おのこの部隊の消耗を案じて積極的な戦いを避けるなどしたために、紅軍の反撃に遭って惨敗した。

紅軍の脅威はこれだけにとどまらなかった。一九三四年十月に江西の根拠地を放棄した中央紅軍は北上を開始し、貴州を経由して四川に入る勢いを示した。蒋介石にはこうした紅軍の動きへの対処を劉湘に直接指示しておく必要があったし、劉湘にも四川における自らの権威の確立と軍費や武器弾薬の補給のために、蒋介石の

支持をとりつけておく必要があった。劉湘は、その代表として上海に駐在させていた鄧漢祥を漢口に呼び寄せて、国民党中央軍を四川に入らせることは何としても避ける方針を確認した後、ともに南京に向かった。

「前の出来事を忘れず、後の教訓とする、だ。四川は他の省とは違う。万に一つも過ちがないようにし、災いを未然に防ぐために、わたしには中央軍の精鋭十個師団を四川に派遣する用意がある。甫澄〔劉湘の字〕、君はどう思う。むろん、四川に入る中央軍は、必ず君の指揮下に入らせる」。この時、会見の場にいた人はみないくらか緊張して、じっと劉湘を見つめた。この蒋介石の言葉は一振りの刀のように、びたりと劉湘のみぞおちに突き付けられたのである¹¹。

田聞一は、『混戦 争覇巴蜀』の第九章「美人の計にかかり、小人物が大事を損なう」の中で、飛行機で南京に到着した劉湘を、蒋介石が妻の宋美齡や側近らを伴って飛行場に出迎えるという、実際にはなかった場面を配している。これは、蒋介石が劉湘を四川の覇者として重く見ていたことを示すための設定であると考えるのが妥当であろうが、さらに踏み込んで考えると、この設定によって、右に引用した、晩餐会の席上で蒋介石が劉湘に中央軍の四川入りを迫る場面の緊迫感をより高める狙いがあったのかもしれない。

蒋介石は、このように、劉湘を飛行場まで親しく出迎え、晩餐会では四川料理を用意するなど歓待ぶりをして、劉湘に否やをいわせない状況を作り出しているが、劉湘は突きつけられた要求にどのように対したであろうか。

鄧漢祥がしきりに目くばせをしているのを見て、劉湘の頭の中で四川に関する警句が電光石火のように閃

いた。彼は蔣をすこし脅かしてやろうと思ひ、誠実な態度を作つて、蔣介石にいった。「委員長、昔から、天下未だ乱れざるに蜀先ず乱れ、天下已に治まるに蜀後れて治まる、といひます。四川はこれまでずっとこのうでした。いま四川は戦乱が収まったばかりで、省内には流言やデマがさまざまに飛び交つていて、不安定な要素が多いのです。中央軍の入川については、困難な点がとて多く、いまここで委員長にすぐにお分かりいただけるように報告することができません。」

蔣介石は果たしてこの言葉を聞き入れた。天下未だ乱れざるに蜀先ず乱れ、天下已に治まるに蜀後れて治まる。四川はまさにずっとそうであつた。彼はまばたきをして少し考えると、決定を下した。「こうだ。この事は張部長、それから永泰に任せて、鳴階先生と詳しく、具体的に詰めてもらうことにする。いいな。」

蔣介石の正面からの圧力にさらされて窮地に陥つたかに見えた劉湘であつたが、とつさに四川統治の難しさを端的に表す常套句を想起して、蔣介石の要求をかわした。田聞一は、両者の思惑がぶつかつて火花が飛びそつた緊迫した状況を作り出し、その中で劉湘が機転を利かせて巧みに危地を逃れるさまを描いている。

鄧漢祥の懸命な交渉もあつて、劉湘はこの南京での会見で、政治面では四川省政府主席の地位を得、軍事面では四川剿匪總司令の地位を維持して、政治と軍事の両面で名実ともに四川の第一人者となつた。また、武器弾薬の支給、および軍事費の支給の確約も得た。¹³⁾

そして、何よりも国民党中央軍の入川をひとまず阻止したことが、最大の収穫となるはずであつたが、その代替として、参謀団を重慶入りさせて紅軍攻撃の支援をおこなうことを認めさせられた。この参謀団入川は、蔣介石による四川支配の先兵となるものであり、劉湘はその対処にずっと頭を悩ませることとなる。

三 特務の暗闘

参謀団は正式名称を国民政府軍事委員会委員長行營参謀団という¹⁴。一九三五年一月に、賀国光に率いられて重慶に入った。賀国光は、湖北出身であるが劉湘とは四川陸軍速成学堂の同窓生の間柄であり、蒋介石の信任厚く、入川前は南昌の行營で参謀長を務めていた。このように、蒋介石は、参謀団を四川に駐在させるにあたって、人事の面で劉湘に一定の配慮を示したようであったが、一方で、別動隊を組織して四川出身の康沢に率いさせた。康沢は黄埔軍官学校の卒業生で、モスクワ留学の経験もある、蒋介石の腹心であった。彼は国民党の特務機関である復興社の幹部であり、四川に入ってから重慶や成都をはじめ、各地で特務活動を展開した。劉湘は、別動隊による破壊活動に対しては、とりわけ神経をとがらせていた。鄧漢祥も回想文で、「劉が毎日収集した情報は、そのほとんどが復興社分子による破壊活動の状況に関するものであった」と述べている¹⁵。劉湘が情報を入手する経路は二つあった。一つは暗号電報の解読であり、もう一つは配下の冷開泰からの報告であった¹⁶。

田聞一によれば、冷開泰は匪賊あがりの軍人で、上海の青幫の首領である杜月笙と関係のある人物であった¹⁷。劉湘が冷開泰に指示をする場面を、田聞一は次のように語っている。

「わたしが南京で、中央と締結した『紀要』には、参謀団は重慶に駐在するが、四川の地方事務に介入してはならないと、明確に規定してある。ところが今やつらは規定を守らず、成都に人を潜り込ませて悪事の限りを尽くしておる。おまへたちは捕らえるべきは捕らえ、押さえるべきは押さえるのだ。重大な場面では、反抗してくれば、発砲してその場をかたをつけてもかまわん。ただし二つの点に注意するのだ」。劉湘は濃

い眉をつりあげ、二本の指を立てていった。「一つ、緊急の場合には、その場の判断で処置してよろしい。ただし、事後に必ず詳しく報告すること。二十四時間いつでも来てよろしい。二つ、事後には新聞で発表すること。おまえたちに殺された人間は、すべて法を犯した悪党ということにする。つまり、重慶の側が、口のきけない者が黄連を飲むで、苦くても口に出せないようにしなければならん。この事はわたしから宣伝部部長の梁高に話しておく。おまえたちは互いに協力し合うのだ。この点が最も重要だ。わかるな。どうだ」¹⁸。

右は『混戦 争覇巴蜀』第十二章「黒が黒を食い、針の先が向かい合う」の一場面である。冷開泰に対する劉湘の指示からは、田聞一が塑像する劉湘の形象の幾つかの側面を読み取ることができる。

まず、「その場でかたをつける（就地正法）」という言い方からは、たとえ蒋介石の配下であろうと射殺せよという断固たる態度をひとまず見て取ることができる。そして、この断固たる態度の根底には、蒋介石に対する反感あるいは憎悪があり、さらには蒋介石の圧力から何としても四川を守らねばならないという責任感があるはずである。

次に、「二十四時間いつでも来てよい（二十四小時都可以找我）」という言葉からは、目の前にいる冷開泰に任務の重要性を理解させて細大漏らさず報告をさせようという意図がまず見て取れる。しかし、この言葉の背後には蒋介石に対する慎重な配慮があることを見逃してはならない。「二十四小時都可以找我」は、万が一、諜報員殺害に関して照会や問責があった場合に、言い抜けをするための準備を常におく必要があると、劉湘がきちんと認識していることを示唆する言葉としてとらえるべきであろう。

さらに、「事後には新聞で発表する（事後要登報）」という言い方は、殺害したのは悪党であるとして、その諜報活動に一切言及しないことで知らぬ顔の半兵衛を決め込み、非難の手がかりを与えないための措置である

と読み取れる。しかし、この言葉で重要なのは、殺害した人物と蒋介石あるいは国民党との関係を記載しないことではなく、殺害の事実を公表する点にこそある。水面下の事実を伏せておくとしても、水面上に現れた氷山の一角を民衆に見せておくことが重要であり、そうしておくことによって、蒋介石が劉湘に対して何らかの動きを見せようと考えた時に、劉湘の背後に民衆の存在を意識せざるをえない状況を作っておこうとする、劉湘のいわば予防手段である。

「口のきけないものが黄連を飲む（啞子喫黄連）」は、そのことを端的に、そして通俗的に表現する歇後語である。この言葉を用いたのは、軍人らしい規律ある言葉遣いが苦手な匪賊上がりの冷開泰に対して、劉湘が一定の配慮を示したものと考えられる。冷開泰が理解しやすいように、また、自分に信頼感あるいは親しみを劉湘がもってくれていると感じるようなという狙いがあったのであろう。

田聞一はこのように、劉湘を、蒋介石に対してはもちろん、部下に対しても周到な用意をもって臨むことができる、思慮深く、かつ決断力に富む人物として描き出しているのである。

四 峨眉山軍官訓練団における演説

四川省西部を北上していた中央紅軍は、一九三五年六月に懋功県で紅四方面軍と合流した。紅軍の脅威がやや遠ざかったこの時期をとらえて、蒋介石は峨眉山の麓において、自らを団長とする軍官訓練団を組織した。この訓練団の目的は、端的にいえば、擁護と反共にあり、各地から集めた四川軍の將校にその意識を強く植え付けるために、蒋介石自身も何度か訓話をおこなった。

四川軍閥の領袖である劉湘は副団長、劉文輝と鄧錫侯は団附に任じられ、蒋介石の訓話や教育長である陳誠

の講話の際には出席を余儀なくされた。蒋介石は、一つの党、一つの政府、一人の指導者のもつて意思を統一し、力を集めることを繰り返して強調したが、陳誠は共産党を罵倒するとともに、返す刀で地方の軍隊、つまり四川軍をも切り捨てた。¹⁹⁾

これに対して、四川軍閥の領袖たちは、あからさまにならない形で抵抗をしてみせた。田聞一は、その抵抗を次のように語っている。

陳誠が講話を終えて、各隊に戻って討論するよう言い渡そうとした時、劉湘が歩み寄ってきて、手をたたきながら、「陳教育長のお話は素晴らしい、お見事でした。わたしもすこし話をさせていただいてよろしいか」といった。

陳誠は劉湘を見て、口ごもりながら、「結構です。むろん結構です」といった。背が高く体格もいい劉湘が進み出て、小さな台の上の、赤い絹で巻かれたマイクを取って、ぐいっと握ると、会場に大きな音が響き渡って、彼の心中の憤りを発散させた。陳誠は劉湘がこのように出てくるとは思わず、驚いて後ずさりをした。大勢の眼前で的一幕に、一千名にのぼる學員たちは思わず笑った。軍官訓練団の學員はほとんどが四川軍の将校で、最も多かったのが「劉湘直属の」二十一軍の将校たちであった。このどっと沸いた笑いは、明らかに劉湘への支持であった。²⁰⁾

右は『混戦 争覇巴蜀』第十六章「戯中に戯あり、峨眉山軍官訓練団」の一場面である。一千名にのぼる四川軍の将校を講堂に集めて、いつものように、国民党軍の実力をことさらに強調し、地方軍の無能をこきおろした陳誠が話を終えると、いつもはその話をじっと聞いているだけの劉湘が歩み寄って、自分にも話をさせろ

という。この場面の叙述からは、劉湘の突然の申し入れに陳誠が意表をつかれたこと、および陳誠が劉湘に氣おされているさまがみてとれよう。

さらに、四川軍の側に視線を移してみると、陳誠の講話に対して、劉湘が静かな、しかし強い怒りを抱いていたこと、そしてその怒りは学員として召集された四川軍の將校たちも等しく感じていたことを読み取ることができる。

田聞一は、「背が高く体格もいい（長得又高大）」という外面描写によって、体つきや押し出しの点で劉湘が陳誠を圧倒していることを語るとともに、マイクを握る音の大きさとその音の会場への広がりを書き記すことによつて、劉湘の怒りの強さを示唆している。直後におかれた、劉湘の行動に共感を表わす四川軍將校たちの反応、および、劉湘に続く形で四川軍閥の領袖である劉文輝と鄧錫侯も演壇に立って話をする場面も合わせて読んだ時、劉湘の存在感の大きさが伝わる叙述となっていることがわかるだろう。

劉湘は、陳誠や国民党の幹部、そして四川軍の將校を前にして、目下の最も緊要な問題は日本軍の南下であると述べた。これは擁護と剿共とを掲げる訓練団の方針とは異なるものであつて、劉湘は四川軍の総帥として国民党とは別の見解を提起したことになる。

劉湘はなぜこのような話をしたのであろうか。まず国民党に対しては、四川軍を切り崩して国民党の側に立たせようとするのは容易なことではないと警告する意味があつたと考えられる。参謀団が四川に入ると、四川省内各地の政府や軍隊に要員を送り込んで監視し、管理下に置こうとして準備を進めてきた。劉湘は、国民党のなすべきことは地方軍閥の整理、吸収ではなく、国民党軍と地方軍が力を結集して日本軍の脅威にあたることであると述べることによつて、国民党の動きを牽制したのであろう。

さらに、四川軍の將校に対しては、四川軍は国民党に唯々諾々と従うことはないという意思表示をして、国

民党による思想教育に不満と不安を抱いている彼らに、四川軍人としての矜持を取り戻させるための行動であると考えていいだろう。

「君はわかっていない」。蒋介石はいった。「君は彼らがとりとめのない話をしたと思っているのか。てんでばらばらの話をしたと思ってるのか。彼らの話の意図を君は理解していない。やつら田舎の親玉はみな一筋縄ではいかないのだ。劉自乾〔劉文輝〕は「多宝道人」と呼ばれておるし、鄧晉康〔鄧錫侯〕は「水晶猴」だ。この劉甫澄というやつは、見かけは誠実で温厚そうだが、本当のところは誰の手にもおえない闇魔で、恐るべき四川王なのだ」。

田聞一は、蒋介石が陳誠を呼んで訓練団の総括を求めた際に、劉湘らへの対応について戒めを与える場面を設けている。劉湘ら四川軍閥の領袖が將校たちを前に話をしたのは、思い付きや自らの体面を保つためではなく、思惑があつてのことであり、そのことを理解しなければならぬと、蒋介石は論じている。さらに、劉文輝はさまざまに手段を弄することができ、鄧錫侯はすべてを見通すことができる狡猾な存在であるが、劉湘こそは最も恐ろしい相手であると述べて、注意するよう陳誠に促している。

劉湘は、四川という一地方の支配者ではあったが、蒋介石にとっては容易に抑え込むことのできない厄介な相手であった。田聞一は、蒋介石の口を借りる形で劉湘の存在感の大きさを語っているのである。

五 国の為に孝ならんことを求む

ここまで見てきたように、田聞一は、四川の覇者として四川を守るために、麾下に人材を集めるとともに、蒋介石と正面から衝突することを避けながら、細心の注意を払ってさまざまな対抗手段を駆使する人物として、劉湘の形象を描いてきた。しかし、劉湘は常に知略の限りを尽くして蒋介石に立ち向かう、隙のない英雄として塑像されているわけではない。田聞一は、劉湘が成都の老英雄である尹昌衡と一時をともにして蒋介石との暗闘によって消耗した氣力を回復しようとする場面も設けている。

尹昌衡は清末に日本に留学し、民国初期には四川都督を務めたこともある人物であったが、「二劉決戦」の頃にはすでに引退して、成都在住の知識人「五老七賢」の代表として支配者に歯に衣を着せずものをいう、ご意見番的な存在になっていた。²²

劉湘は、尹とともに皇城の明遠樓に登って、眼下の皇城広場を眺めた。すると、辛亥革命の直後に、尹が清朝の四川総督であった趙爾豊を処刑した時の光景が眼前に浮かんできた。

一筋の斜陽の光が「為国求孝」の牌坊の上から差し込んできた。趙爾豊の一生を思い、目の前にいる尹昌衡の一生を思って、劉湘は心中感慨にたえなかった。

「老人、ここに立たれて、感慨ひとしおでありますよ」。劉湘は尋ねた。

「すべて過ぎ去ったこと、好漢は昔の武勇伝など語らぬものだ」。尹昌衡は秋の日差しの下で、彫刻が施された玉の欄干をなでて、切れ長の目を細めると、今度はあごの下の白いひげをなでながら、「甫澄よ、この世にはその時代その時代に才人が現れる。いまの四川のこの一幕は、おぬしがどう演じるかにかかっている

のだ。

「わたしは決してご老人の信任、重託に背きはいたしません」⁽²³⁾。

右は『混戦 争覇巴蜀』第十八章「自ら保つことを求め、「四川王」反撃す」からの引用である。劉湘は、尹昌衡と皇城の楼に登ることで、四川における辛亥革命の重大事件である趙爾豊処刑を振り返り、四川が清朝官僚の手から四川人のもとに戻った時のことを思い起した。そして「川人治川」の実現のために人生をかける決意を新たにした。

右の引用からはこのようなことが読み取れよう。過去の英雄と現在の英雄が楼上に並び立って成都を眺める場面からは、劉湘の器量の大きさと責任の重大さが伝わってくる。尹昌衡が辛亥革命期に四川都督として担った重責と果たした功績が、四半世紀後の新たな状況の中で今度は劉湘に引き継がれたことがこの場面に象徴されているからである。

田聞一は、あるいは趙爾豊によって蒋介石を暗示し、劉湘の意識の中には蒋介石を倒すことも秘められていたとまで考えているのかもしれない。それはともかく、劉湘は過去を想起することで、蒋介石から四川を守る戦いを続けていく決意を新たにした。しかし、彼の身体はすでに病魔に侵されていた。別れ際に、尹昌衡は、病身をおして六たび祁山に出陣した諸葛亮のようにならないようにと案じてくれた。老英雄のこうした期待と気遣いとは、やはり劉湘の存在感の大きさを説明している。

田聞一は、『混戦 争覇巴蜀』では劉湘が一九三七年十一月に抗日のために出陣するところで筆を擱いているが、『霧鎖峨眉 蒋介石謀取四川紀実』では一九三八年一月に武漢で逝去し、成都で国葬がおこなわれるまでを叙述している。その中で、劉湘が生前に書いた杜甫の「蜀相」の尾聯「出師 未だ捷たずして身 先ず死

し、長く英雄をして涙襟に満たしむ」が遺品として見つかったことに言及している。

劉湘が自らを蜀の英雄である諸葛亮に比していたことを小説の中に取り込むとともに、さらにそのイメージを増幅させて劉湘の英雄としての形象をより鮮明にするために、田聞一は、劉湘と尹昌衡が楼上に並び立つ場面を配置したのである。

六 南京国防会議での決意表明

劉湘と四川軍の弱体化を図って、蒋介石は一九三七年七月に重慶で川康整軍会議をおこなった。会議の主催者である何応欽は、四川の各軍は一律にその三分の一を縮減するとの方針を打ち出したが、会期中に盧溝橋事件がおこったために、四川軍縮小のことはしばらく棚上げとなった。

蒋介石は、盧溝橋事件の翌月に各地の政治・軍事の責任者を南京に集めて国防会議を開いた。席上、劉湘は演説をおこなって四川の総力をあげて日本と戦う強い決意を表明した。

「昨夜、委員長からお尋ねがあり、わたくしは考えを申し上げた。この機会を借りて、わたしは改めて申し上げます。戦端が開かれれば、わが四川はただちに兵三十万を出し、壮丁五百万を提供し、食糧一千万石を供給する。わたくし劉甫澄は断固として先頭に立ち、軍を率いて抗戦に赴く。つまり、抗戦のために、わが四川軍民は中央および蔣委員長の指導の下に必ず全力を尽くすだろう。この志は最後まで変わらない。抗日に勝利し、日本軍が国境の外に退くまで、わが川軍は誓って故郷に戻らず、抗戦の最終的な勝利を勝ち取って、わが中華民族の独立と自由の目的を達成するのだ」。

どよめきとともに、劉湘が話を終えると、会場全体に拍手の音が響き渡って鳴りやまず、会場の雰囲気は一気に最高潮に達した。ところが、この時、劉湘は突然眉をしかめ、顔からは血の気が引いて、豆粒のような汗を滴らせると、身体が前かがみになって、ゆっくりと床に倒れた²⁴。

右は『混戦 争覇巴蜀』第二十章「転換、劉湘は慷慨し縷を請うて抗戦す」の中の劉湘の演説場面である。議長を務める汪精衛が会議の趣旨説明をおこなった後に出席者の発言を求めると、劉湘が真っ先に手を挙げて演壇に立った。そして四川を発つ時に発表した「民族救亡抗戦のために四川各界の人士に告げる書」を悲憤慷慨の面持ちで読み上げた後に、右の決意表明をおこなった。

劉湘は、四川が全省を挙げて日本と戦うこと、劉湘自らがその先頭に立つこと、それらは蔣介石の指揮下でおこなわれること、日本軍を中国から駆逐するまで戦いを止めないことを述べた。

それまで強大な日本軍と正面切って戦うことを避けて妥協を繰り返してきた国民政府であったが、この劉湘の演説を契機として徹底抗戦の主張が主流となり、汪精衛らの意見が退けられて蔣介石を中心とする一致抗日の体制が構築されることとなった。田聞一は、演説を終えた劉湘が胃潰瘍の発作で倒れる場面を置いて、その悲壮さを一層強調している。

鄧漢祥の回想によれば、この国防会議の冒頭で発言したのは蔣介石で、閻錫山がこれに続いて、劉湘の演説は三番目であった。また、劉湘が倒れたことに関する言及は見られない²⁵。

田聞一が、真っ先に手を挙げて発言を求め、断固として抗戦の決意を表明する劉湘を描いたのは、劉湘が単に四川という一地方の支配者であり、夜郎自大の考えにとらわれていた狭量な人物ではなく、中華民族の危機に際して敢然と立ちあがる愛国者であったと評価していることの表れであろう。

田聞一は、さらに、演説によって会場全体に抗戦の雰囲気を横溢させた劉湘が直後に倒れる場面を配して、ほどなく劉湘の生命の火が消えてしまうことを暗示し、劉湘を悲劇の英雄としても塑像している。

このように、田聞一の劉湘に対する評価は極めて高いといっても過言ではない。

おわりに

さきに拙論「成都市街戦の再現——李劫人と田聞一の語り」の中で、田聞一の『成都巷戦一九三二』は演義体を用いた小説であると述べたが、本論で取り上げた『霧鎖峨眉 蔣介石謀取四川紀実』および『混戦 争覇巴蜀』も同様に演義体によって叙述された小説である。

これまで見てきたように、劉湘が天津に密かに赴いて鄧漢祥を訪ねる場面や、南京における国防会議において国民党の最高幹部や大軍閥の領袖を差し置いて真っ先に発言する場面を設けるなど、事実に少なからず潤色を加えていることや、峨眉山軍官訓練団や南京国防会議での演説場面の扱いを大きくしてそれぞれの章においてクライマックスを作り出していることなどを、その語りの特徴として挙げるができる。

加えて、劉湘の人物の塑像に際しては、『三国志演義』に登場する劉備や諸葛亮のイメージを利用して、読者に鮮明で親しみ深い印象を与えていることにも注意しなければならない。

田聞一は、四川を呑み込もうとする強力な外来政権に敢然と立ち向かい、さらには中国を侵食せんとするより強大な外国と死を賭して戦おうとした英雄として、そして志半ばにして不幸にも病に倒れた悲劇の主人公として、劉湘を塑像し、その人物形象を鮮明な形で読者に示すために演義体の語りを用いているのである。

田聞一はなぜこのように劉湘を高く評価したのであろうか。四川人として、郷土の英雄である劉湘に尊敬と親しみを感じていることは当然あるだろう。だが、それだけではあるまい。高い評価の根底には、少年時代に見た光景があるように思われる。田聞一が自身の半生をつづった文章の中に、中学生のころ、清明節に父親や近所の大人に連れられて武侯祠に近い南郊公園に行った時のことが記されている。公園の裏手には、見る影もなく荒れ果てた陵墓があつて、それが劉湘の墓だと教えられたという。²⁷

大人たちが涙しながら語る劉湘の事績とあまりにも対照的な眼前の穴だらけの陵墓の光景は、少年の記憶に長く留まることとなった。後年、劉湘について様々な資料を渉猟しながら理解を深めていく中で、この少年時代の記憶が触媒となって劉湘に対する高い評価が生まれたのではないだろうか。田聞一が、別の長篇小説『血戦 川軍出征』で、劉湘亡き後の四川軍の抗日戦における奮闘を描いていること²⁸も、このことを裏付けているように思われる。

注

- (1) 『李大白全集』、中華書局、一九七七年、卷三、一六二頁。
- (2) 喬誠・楊統雲『劉湘』、華夏出版社、一九八七年、序。
- (3) 今井駿『四川省と近代中国—軍閥割拠から抗日戦の大後方へ—』、汲古書院、二〇〇七年、第五章「四川省統一と「中央化」の進展」、一五九頁。
- (4) 拙論「成都市街戦の再現——李劫人と田聞一の語り——」(『アカデミア』文学・語学編第一〇七号、南山大学、二〇二〇年一月)。
- (5) 喬誠・楊統雲『劉湘』(前掲注(2))、四七頁。

- (6) 田聞一『霧鎖峨眉 蔣介石謀取四川紀実』、四川人民出版社、二〇一三年、一〇三頁。原文は以下の通り。
 而這時、遠在四川重慶、一心想武力統一四川、做「四川王」的劉湘瞅準時機、專程去天津恭請鄧漢祥出山相助。輕衣簡從的劉湘、到了天津、找了一個離鄧漢祥家很近的中等旅店住下、不顧長途奔波、立刻前去拜訪。
- (7) 段祺瑞が、直隸・安徽戰爭に敗れて下野を表明したのは一九二〇年八月のことであり、田聞一のこの西暦年の記述は誤っているように思われる。
- (8) 田聞一『霧鎖峨眉 蔣介石謀取四川紀実』(前掲注(6))、一〇三頁。原文は以下の通り。
 鄧漢祥對劉湘印象不錯。作為四川近隣の貴州人鄧漢祥、平時對川局和川局中人特別關注。他知道、劉湘是個頗有實力的將軍、讓他最爲動心的是、劉湘能禮賢下士・平生潔身自好、不濫煙酒、不抽大煙、不嫖不賭、不蓄妓納妾、這有多麼難得！
- (9) 喬誠・楊統雲『劉湘』(前掲注(2))、五九頁および一〇四頁。また、陳雁鞏「憶劉湘与鄧漢祥的関係」(成都市政協文史學習委員會編『成都文史資料選編 防区時期卷』、四川人民出版社、二〇〇七年、六二頁)によれば、鄧は一九二八年の夏に、貴陽に戻る途中に重慶に立ち寄って劉湘に引き留められたが、その時は他日を期して別れた。貴陽では周西成の高等顧問を務めたが、雲南軍閥の龍雲との戦闘で周が戦死し、雲南軍が迫ってきたために、貴陽を脱出して重慶に逃れたという。
- (10) 喬誠・楊統雲『劉湘』(前掲注②)、一五四頁。
- (11) 田聞一『混戦 争覇巴蜀』、中国文史出版社、二〇一九年、一五三頁。原文は以下の通り。
 「前事不忘、後事之師。四川不是一般的省、爲了做到萬無一失、防患於未然、我準備派中央軍十個精銳師入川、甫澄備看如何？當然、這些入川四川中央軍、絕對聽從備的指揮。」這一下、與會的人都有些僵、定定地看着劉湘、他們都知道、蔣介石此舉猶如一把刀子、尖端遞到了劉湘心口上。
- なお、この小説は、既刊の長篇小説五作品を集めた川軍全紀実系列の一冊として刊行されているが、最初は二〇〇七年に『争覇四川』というタイトルで解放军文芸出版社から刊行されている。
- (12) 田聞一『混戦 争覇巴蜀』(前掲注(11))、一五四頁。原文は以下の通り。

看鄧漢祥頻頻向自己示意，劉湘這時思想上忽然電光石火地閃出一些有關四川的警句，他決定嚇一嚇老蔣，這就做出一副很誠懇的樣子，對蔣介石說，「委座，自古有言，天下未亂蜀先亂，天下已治蜀後治。四川歷來如此。目前川省戰亂剛平，省內種種流言，謠言四起，不穩定因素很多。對中央軍入川，碍難之處甚多，不是一時半會兒可以對委座匯報清楚的。」

蔣介石果然聽進去了，天下未亂蜀先亂，天下已治蜀後治，四川確實歷來如此。他眨起眼睛想了下，一錘定音，「這樣，這個事下來由張（群）部長，還有永泰，一起同鳴階先生詳談，具體談！嗯？」

(13) 段渝主編『抗戰時期的四川』，巴蜀書社，二〇〇五年，七、八頁。

(14) 鄭文遠「駐川「參謀團政訓處」組織系統与反共罪行」（中國人民政治協商會議四川省成都市委員會 文史資料研究委員會編『成都文史資料選輯 第十三輯』，一九八七年，二、三、九頁）では，国民党政府軍事委員會委員長南昌駐川參謀團と記載されているが，国民党政府は国民党政府の誤りであろう。

(15) 鄧漢祥「劉湘与蔣介石的勾心鬭角」（四川省政協文史資料委員會編『四川文史資料集粹』第一卷政治軍事編，四川人民出版社，一九九六年，七七、七頁）。

(16) 喬誠・楊統雲『劉湘』（前掲注（2）），一八七頁。

(17) 田聞一『混戰 争霸巴蜀』（前掲注（11）），一九六頁。

(18) 田聞一『混戰 争霸巴蜀』（前掲注（11）），一九九頁。原文は以下の通り。

「我在南京，同中央簽定的『紀要』中有明確規定，參謀團駐在重慶，不能插手四川地方事務。然而他們現在不守規矩，已經派人滲透到成都來胡作非爲，倆們該抓就抓，該管就管。關鍵時刻，若遇反抗，倆們可以開槍，就地正法！不過要注意兩點！」劉湘說時，濃眉聳聳，豎起兩根指頭。「一、如果事情緊急，倆們可能以當機處置，但事後必須向我做詳細報告，二十四小時都可以找我；二、事後要登報！被倆們正法的人，一律安以違法歹徒名稱。總之，事情要做得讓重慶方面啞子喫黃連——有苦說不出！這個事，我下來給宣傳部部長梁高打個招呼，倆們互相協調協調，這點最重要。懂不懂？嗯。」

(19) 楊學端『峨山軍官訓練團』第一期的回憶（四川省政協文史資料委員會編『四川文史資料集粹』前掲注（15））。

七一五〜七一六頁）。訓練団の団は軍隊という連隊を意味するものと思われる。なお、楊によれば、第一期の団を構成した三個大隊の大隊長には四川軍の軍長クラスが、中隊長には同じく師団長クラスが配置されていた。

(20) 田聞一『混戦 争覇巴蜀』（前掲注（11））、一五七頁。原文は以下の通り。

陳誠講完話後、正要宣布各隊拉回去討論時、劉湘走了上來、手掌兩拍：「陳教育長講得好、講得妙。教育長、不知我可不可以講兩句？」

陳誠看着劉湘、結巴着說：「可以、當然可以。」長得又高又大的劉湘走上前來、將擺在小桌上、用紅綢裹着的麥克風提起、用勁一碰、會場上發出一聲轟響、發洩着他心中的憤怒。陳誠萬不諳劉湘會來這一手、嚇得往後一退。這明火執仗的一幕、引得上千名學員不由得笑了。軍訓團學員大多是川軍將士、最多是二十一軍的軍官們。這哄地一笑、明顯是對劉湘的支持。

(21) 田聞一『混戦 争覇巴蜀』（前掲注（11））、一五六頁。原文は以下の通り。

「這倆就懂不了！」蔣介石說、「倆以為他們不知講到哪裏去了、倆以為他們在東說南山西說海嗎？倆沒有聽出他們講這些話的用意。這些地頭蛇沒一個是簡單的。劉自乾有「多寶道人」之稱、鄧晉康叫「水晶猴」、這個劉甫澄呢、貌似忠厚、其實是個誰也惹不起的閹王、是個很厲害的「四川王」。」

(22) 尹昌衡は一八八四年生まれ。一九〇二年に開設された四川武備学堂の一期生として学び、成績優秀を以て日本に派遣されて陸軍士官学校で学ぶ。帰国後は四川陸軍小学堂の総弁などを務め、辛亥革命後には四川軍政府の都督に就任したが、一九一三年に袁世凱によって投獄され、長い獄中生活を送った。出獄後は成都で学問に専念した（四川省地方志編纂委員会省志人物志編輯組『四川近现代人物伝』第二輯、四川省社会科学出版社、一九八六年）。

(23) 田聞一『混戦 争覇巴蜀』（前掲注（11））、一八五頁。原文は以下の通り。

一縷斜陽從「爲國求孝」牌坊上掠過來。想着趙爾豐的一生、想着面前尹昌衡的一生、劉湘在心中不勝唏噓。

「老英雄、身處此地、倆一定感慨萬千吧？」劉湘問。

「都過去了、好漢不提當年勇。」尹昌衡在秋陽下、手撫玉石彫欄、眯了眯他細長的眼睛、再以手撫着領下一把花白鬍子、「甫澄、江山代有才人出、現在四川這台戲就看倆咋唱了！」

「我一定不辜負老英雄的信任、重託！」

(24) 田聞一『混戰 争覇巴蜀』(前掲注(11))、三二二頁。原文は以下の通り。

「昨晚、蒙委員長垂訊、我向委員長表示了態度。借此機會、我再次表示、戰端一開、我四川立刻出兵三十萬、提供壯丁五百萬、供給糧食千萬石。我劉甫澄堅決請纓牽軍出川抗戰。總之、爲抗戰、我四川軍民一定在中央暨蔣委員長領導下竭盡全力、一本此志、始終不渝。即抗日一日不勝利、日寇一日不退出國境、我川軍一日誓不還鄉、以爭取抗戰最後勝利、以達我中華民族獨立自由之目的！」

「嘩」的一聲、劉湘說完話後、全場爆發出經久不息的掌聲、將會場氣氛一下推向了高潮。然而、這時劉湘却突然双眉緊蹙、臉色蒼白、豆大的汗珠從他的臉頰上滴下來、身子向前佝僂、漸漸地倒在地上。

(25) 鄧漢祥「劉湘与蔣介石的勾心鬭角」(前掲注(15))、七八六頁。

(26) 拙論「成都市街戰の再現——李劫人と田聞一の語り——」(前掲注(4))。

(27) 田聞一『夢回寬巷子』、成都時代出版社、二〇一四年、「捌 人情冷暖」一二〇～一二四頁。

(28) 田聞一『血戰 川軍出征』、中国文史出版社、二〇一九年。この小説も川軍全紀実系列の一冊であり、最初は『川軍出峽』のタイトルで解放軍文芸出版社から二〇〇九年に刊行されている。

追記 本稿は、平成三十一年度文部科学省科研費基盤研究(C)「文学を通じて見る中華民国期における軍隊の存在感と影響力についての研究」(課題番号18K00359)の成果の一部である。

Evaluation of the Warlord by a Sichuan writer:

Mainly on “Hunzhan- Zhengba BaShu” by Tian Wenyi

Hiroshi NAKA

Abstract

In the first half of 20th century, Sichuan province was invaded by neighboring provinces several times. But Sichuan armed forces barely drove them out of Sichuan province. On the other hand, Sichuan province was infested with many local armed forces in that time, and they also conflicted each other. The man who succeeded in taking control of the confusion and united the whole of Sichuan province was Liu Xiang (劉湘). Liu Xiang, besides, suppressed many communists and fought with the army of the Chinese Communist Party, and against Jiang Jieshi (蔣介石) who aimed at absorbing Sichuan province, Liu Xiang also struggled for several years. Tian Wenyi (田聞一), as a Sichuan writer, regarded Liu Xiang highly, as a hero of the War of Resistance Against Japan, in his novel “Hunzhan (混戦)– Zhengba BaShu (爭霸巴蜀)”.

Tian Wenyi used the style of the historical romance and made use of some main characters in “The Romance of the Three Kingdoms”, such as Liu Bei (劉備) and Zhuge Liang (諸葛亮). By the outstanding description of Liu Xiang, Tian Wenyi indicated his high evaluation of Liu Xiang who was from the same province with him.